

# かどで 街 田盆

## 親であり家族でもある

### 日野南の大多良稻荷

住宅街に囲まれたわずか5坪ほどの敷地にひつそりと佇む「大多良稻荷」。地域の農家が数軒集まつて講中<sup>こうじゅう</sup>を組み、平安時代から守り継いできたとされる日野南2丁目の稻荷で2月6日、稻荷講が肅々と行われた。

稻荷講とは、地域の農家の守り神である稻荷にその安全と作物の豊かな実りを祈り、講中が初午の日（毎年2月最初の午の日）に参拝するというもの。かつて、子ども達はこの日にになると赤飯を弁当箱につめてもらいう学校に行つたり、稻荷講が終わると講中の

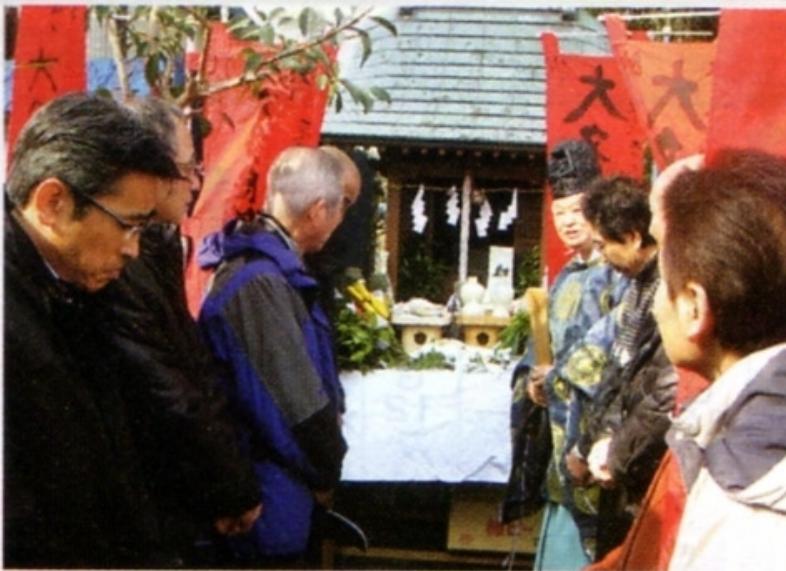
中から持ちまわりで決められた当番が皆を自宅に招いてご馳走をふるまうなど、特別な一日だったそうだ。

講中の代表を務める荒井秀利さん（60歳）は、「今ほど娯楽が多く、日々の生活にあまり変化のなかつた時代。正月やお盆と並びのことなんです」。

稻荷講とは、地域の農家の守り神である稻荷にその安全と作物の豊かな実りを祈り、講中が初午の日（毎年2月最初の午の日）に参拝するというもの。かつて、子ども達はこの日にになると赤飯を弁当箱につめてもらいう学校に行つたり、稻荷講が終わると講中の

中から持ちまわりで決められた当番が皆を自宅に招いてご馳走をふるまうなど、特別な一日だったそうだ。

講中の代表を務める荒井秀利さん（60歳）は、「今ほど娯楽が多く、日々の生活にあまり変化のなかつた時代。正月やお盆と並びのことなんです」。



2月6日の稻荷講